

# 現代英米演劇の研究

日比野 啓

2016年度に引き続き、2017年度に刊行された現代英米演劇に関する書籍・論文の数は多く、とりわけ単著で以下の重要な三冊が出版されたことは嬉しく、ありがたい。

伊藤章『アメリカ演劇とその伝統』（英宝社）

佐和田敬司『オーストラリア先住民とパフォーマンス』（東京大学出版会）

堀真理子『改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』——演出家としてのベケット』（藤原書店）

『アメリカ演劇とその伝統』は、オニール以前の戯曲を書籍のなかでまとめて扱ったおそらく最初の日本語研究書である（19世紀以前の合衆国における演劇文化・上演面についての研究なら、常山菜穂子『アメリカン・シェイクスピア』という名著がある）。植民地期を含む初期アメリカ演劇作品についての研究論文は近年日本でも散見されるようになったが、単行本のなかで相当の分量を割いてオニール以前の戯曲が論じられたことの意義は大きい。

なるほど、アメリカ演劇についての通史として見ると、いくつか注文をつけたい点もある。ミュージカル、ヴォードヴィル、パーレスクなど音楽劇についての記述はほしいし、植民地期に書かれたレーゼドラマとすらいのが憚れるような「戯曲」、とりわけ Mercy Otis Warren のような女性によって書かれたものについての言及もあったほうがいい。昨年逝去した Neil Simon に繋がる二十世紀初頭からの台詞劇としての喜劇の系譜も、日本のアメリカ演劇研究で取り上げられることは少ないが、アメリカ演劇史の重要な一部である。

とはいえ、そのような本格的通史は本国においてと同様、それぞれの分野の専門家が手分けして書くべきものであって、本書のように一人の著者が書いたものには別の魅力がある。伊藤は「アメリカ演劇ではリアリズム演劇は全面的に否定されたことはない」（5）という自説をもとに Royall Tyler から Sam Shepard までを論じる。いずれの論も先行研究に対する適切な目配りをしたあとは自分の頭で考え抜くという、ベテラン研究者ならではの味があり、読み進めていくにつれ、研究とは本来このように進めていくべきものだ、という感を強くする。電子ジャーナルの充実や ILL の普及によって、刊行されたあらゆる関連文献に目を通し、それらを手際よく整理シメタアナリシスを行ったうえで何がしかの自分の意見を付け加える、というスタイルが研究論文として一般的になった昨今、手に入るものをもとにじっくり考えて答えを出すことの重要性を改めて思い知らされる。

## 回顧と展望

『オーストラリア先住民とパフォーマンス』は、オセアニアの先住民(オーストラリア・アボリジニだけでなく、ニュージーランド・マオリも)が何らかのかたちで関わる映画・演劇を包括的に扱っているため、一見バラバラで、統一した視点がないように思える。先住民で組織されるチューキー・ダンサーズのテクノロジーを駆使したパフォーマンスや、『ナパジ・ナパジ』他のストレート・プレイ、アボリジニによるオペラなど、多種多様な事例を紹介したガイドブックに思えなくもない。

ところが読み進めていくにつれ、読者を啓蒙するという方針を佐和田が一貫してとり続けていることがわかる。自らが思索を深めていくにあたっての苦闘の跡を一切残さず、教室で学生に示すように、様々な角度からの検討はするが、結論は既に出ているものとして提示される。対象に対する過剰な共感ほ羨み、距離を保って冷静な筆致で綴っていく。そのような姿勢は、記者者としての自らの立場にたいする鋭い自意識から生まれるものだ。日本ではほぼ知られていない、マイノリティたるオーストラリア先住民の演劇文化を紹介するにあたって、翻訳者として現場での実践にも介入してきた佐和田は、「われこそは理解者である」という態度をとることの傲慢さを十分知っている。読者にその全体像をつかんでほしい、だが異文化の紹介者・理解者が当該文化の篡奪者・横領者になる危険性もわかってほしい、という佐和田の慎重かつ誠実な思いがよく伝わってくる好著である。

『改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』——演出家としてのベケット』は、ベケット研究を長年続けてきた堀の渾身の一冊だ。堀はすでに『ベケット巡礼』で、ベケットに魅入られた自らと向き合い、その思いを率直に語ることで、ベケットとその作品の尽きせぬ魅力を解き明かしてくれた。これ以上何を語ることがあるのだろうと浅薄にも疑問を抱いた評者は読み進めるにつれ、堀のベケットへの思い入れの深さに頭を垂れていった。「あとがき」にあるように、ベケットが自作の演出の際自ら書き改めた『ゴドー』がこれまであまり注目されてこなかったことを残念に思う堀は、第二部においてこの改訂版にもとづき『ゴドー』演出の可能性を追求する。平易で気取りのない文体で綴られていることもあって、該博かつ優秀なドラマツウルクが『ゴドー』上演にあたって演出家のために準備した詳細な研究ノートを読んでいるような気にさせられる。いや演出家ならずとも、詳細な『ゴドー』読解にもとづいて演出プランが次々と提示されることに知的興奮を覚えずにはいられない。通常の研究書のように大仰に構えることなく、ベケットの面白さが自然にわかるように書かれた本作が第28回吉田秀和賞を受賞したのは当然のことだろう。

その他の単著として坂元敦子『テネシー・ウィリアムズ作品研究』(英光社)があった。上記三冊に比べると、深みや広がりはないし、先行研究の吟味も十分とはいえない。とはいえ一冊の大半を費やして、『欲望という名の電車』のプランチが精神病院に収容されるのは、制度や文化が彼女を狂気と判断するからだ」というただ一つのこ

とを様々な角度から論証していく、その知的執念には唸らされた。「何をどれだけ示せたか」が評価基準となる近年の成果主義的発想からいけば、大した成果ではないが、愚直に一つのことにとこだわり、考え続けることにこそ、人文学の反成果主義的な楽しみがある。

他方、そういう愚直さとは正反対の、アクロバティックな知の力技が味わえるのも人文学の面白さだが、下手な真似だけに終わる危険性もある。岩崎徹・渡辺諒編『世界のミュージカル・日本のミュージカル』（春風社）は、英語圏音楽劇についての記述の不十分さが目立つ。そもそも「ミュージカル」とは何かということを論じずに、世界各地の多様な音楽劇の形態を論じるのは学問的手続きとして相当危ういし、編者の一人でもある岩崎徹「英語圏ミュージカル ミュージカル誕生——サヴォイ・オペラ」では、リチャード・ロジャー「ズ」という表記や、「ミュージカルの源流の一つともされる黒人ミンストレルは、十九世紀後半にアメリカで流行したショーで」（38）のような素人同然の誤りに脱力するが、それ以上に著者の学問的誠実さを疑わせるのは、「ミュージカル先進国としてのイギリスの歴史」を遡るといいながら、サヴォイ・オペラのみ言及し、題名ではサヴォイ・オペラがミュージカルの出発点だという虚偽を示唆することである。言うまでもなく、19世紀イギリス音楽劇にはパントマイムや（アメリカの同名のジャンルとは異なった）パーレスクがあった。ギルバート&サリヴァンもその（とくに後者の）伝統に連なるものであるし、ブロードウェイ・ミュージカルにもっとも影響を与えたのは、1890年代以降のミュージカル・コメディである。研究者は自らの専門とする分野だけでなく隣接諸分野についての知識を持つべきだ、とは評者は必ずしも思わないが、いやしくも専門外の分野について言及するのならもっと慎重になるべきだろう。

貴志雅之編『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』（金星堂、2018年）には、西谷拓哉「『世界で一番美しい鳥』——オニールとメルヴィルにおける母胎回帰の夢」、古木圭子「サム・シェパードの戯曲にみる女性の連帯と幸福への脱出」、常山菜穂子「世紀転換期ハワイにおける日本人移民の幸福と演劇的想像力」、黒田絵美子「『普通』への叛逆——一九四〇年代のコメディ分析」、貴志雅之「タブーを犯した成功者——『山羊——シルヴィアってだれ?』における幸福の追求と破壊」、原恵理子「幸福と寛容の表象——ジョン・パトリック・シャンリーの『ダウト——疑いをめぐる寓話』」、森瑞樹「幸福のレトリック——ハミルトン／『ハミルトン』が描いたアメリカ」の七本のアメリカ演劇関連論文が収録されている。しかしながら、独立宣言に謳われた「幸福の追求」がアメリカ文学・演劇においてどのように描かれているかを見ると、同じく2017年に刊行され、評者が編者の一人を務めた『アメリカン・レイバー——合衆国における労働の文化表象』（彩流社）の編集にあたっても痛感したことが、アメ

リカ文学史・演劇を貫く一つの主題を取り上げて複数の執筆者が論じる企画でもっとも難しいのは、その主題の理解をどこまで深くすり合わせるか、ということだ。『アメリカ文学における幸福の追求とその行方』に収録された論文の多くは、幸福の追求という運動ないしは理念ではなく、取り上げる作品においてどのように幸福が表象されているか、という程度の意味で主題を理解し、作品解題を行うかたわらで申し訳程度に言及しているだけのように思える。もちろん、同様の疑念は拙論文「報われない『労働』——『マイ・フェア・レディ』における二種類の情動」を含む『アメリカン・レイバー』についても生じる可能性があるわけだが、これについては読者諸兄姉の判断を待ちたい。

むしろ、西垣内磨留美・山本伸・馬場聡編『衣装が語るアメリカ文学』（金星堂）や、川成洋・吉岡栄一・伊澤東一編『英米文学に描かれた時代と社会——シェイクスピアからコンラッド、ソロー』（悠光堂）のように、漠然とした主題のほうが、各論者が自由に書けるだろう。前者には中垣恒太郎「アメリカ喜劇映画における「女装」の文化史」が、後者には古山みゆき「サム・シェパードの後期の家族劇——『ハートレス』を中心に」、堀真理子「黙示録的時代の英米演劇——キャリル・チャーチル、デニス・ケリー、サム・シェパードの作品から」、小林清衛「英米の劇作品にみられる同性愛——六人の劇作家の場合」の三本の論文が収録されている。「アメリカ喜劇映画における「女装」の文化史」では、専門であるマーク・トウェインとアメリカ大衆文化芸能の深い結びつきに言及しながら、南北戦争期から20世紀初頭までアメリカ民衆の想像力の底部を規定し続け、異性装のコンベンションという意味でも初期喜劇映画に直接影響を与えたヴォードヴィルやバーレスクの伝統を参照していないのは残念である。

他に論集収録論文としては神戸大学英米文学会編『教養主義の残照——Kobe Miscellany 終刊記念論集』（開文社出版）に植田和文「不在の詩人の肖像——テネシー・ウィリアムズ『この夏突然に』」が、また紀要論文としては川島健「若者、ジャズ、社会主義——『怒りを込めて振り返れ』の1950年代」（『同志社大学 英語英文学研究』第99号）、対馬美千子「ベケットの想像力と『人間と世界の絆』（『論叢現代語・現代文化』第19号）、小田島創志「StoppardとHare——20世紀末の“Oscar Wilde”」（『リーディング』第38号）、真野貴世子「誘惑する皮膚と薔薇——Tennessee Williams's *The Rose Tattoo*における詩的想像性としての触覚のオブセッション」（『成蹊人文研究』第26号）などがあつた。日本アメリカ演劇学会発行『アメリカ演劇28』『アメリカ演劇29』ではそれぞれ「サム・シェパードII」「エスニック・マイノリティ演劇」を特集した。

英米演劇受容層の裾野を広げる、ということでは2017年度は英語圏戯曲の翻訳も例年になく多く刊行された。岡村美奈子訳『新訳ベケット戯曲全集1』（白水社）とトム・ストップード、小川絵梨子訳『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』

## 現代英米演劇の研究

(ハヤカワ演劇文庫)は既訳があったものだが、エドワード・ポンド、近藤弘幸訳『戦争戯曲集 三部作』(あっぷる出版)は座・高円寺付設演劇研修所である劇場創造アカデミーが毎年卒業公演で行なっている上演台本を改稿したもので、現場での検証を経たもの。同じくトム・ストップード、小田島恒志訳『アルカディア』(ハヤカワ演劇文庫)も上演台本の改稿で、上演をきっかけにより多くの人が戯曲に目を通すようになってくれると嬉しい。

また、同じく裾野を広げるということで、2016年度の「開学」ではあるものの、最近まで評者がある存在を知らなかったので前回言及ができなかった「オンライン演劇映画大学」(<http://cinemastage.jugem.jp>)についても触れておきたい。「オンライン大学は文部科学省の認可を受けていない文化・教育活動ですが、講座や研究の内容は現実に即したものです。仮想現実上の大学形式ながらも、講座や資料は一部、実際の大学教授とも連携した内容を含んでいます」とあるが、講師である広川治氏、篠山芳雄氏、小島真由美氏、石田伸也氏らが実際にどこの大学でこれらの講義をやっているかは分からなかった。とはいえ、その内容は大体において勘所を押さえた、すぐれたものであり、実際の上演や映画作品とからませて読者の関心興味をかきたてるようになっている点、制度に守られているというだけの、内容の薄い論文よりずっと社会の役に立っていると言えるだろう。かつての研究社『20世紀英米文学案内』のような、英米文学初学者向けであるとともに関心の高い一般読者も読めるような本がなくなってしまったことを常々嘆いている評者だが、案外こういうオンライン史料がその代わりをつとめることになるのではないかという希望を抱かせてくれた。アクセスの増加とともに、何らかのかたちで諸氏の研鑽努力が報われることを祈りたい。(成蹊大学教授)